キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン

ミコタマ

mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2022　第4号

TAKE FREE

多摩で発見、「みち」の冒険

表紙写真

聖蹟桜ヶ丘駅から徒歩 10 分のいろは坂通りで撮影。坂道の左手側には青々とした木々が、右手側には街の景色が広がっています。そこを歩くとまるで自然と人工物の境界線の上にいるように感じました。(2022 年 9 月 29 日)

本誌の編集について

本誌『ミコタマ』は、帝京大学総合博物館（帝京大学八王子キャンパス内）で展開中の「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として作成しています。プロジェクトについては裏表紙をご覧ください。
本誌の企画・取材・文章執筆・デザインは、帝京大学総合博物館の指導のもと、すべて帝京大学に在籍する学生が中心となって行っています。

Contents

キラリと輝く多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するフリーマガジン

ミコタマ mico tama

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン 2022 第4号

「ミコタマ」の名前の由来

ミコタマとは、ラテン語の「輝く」という意味のミコ（Mico）と多摩地域のタマ (Tama) を合わせた言葉です。キラリと輝く多摩の魅力を本紙を通じて記録し、発信したいとの思いを込めました。

帝京大学総合博物館について

本館は 2015 年 9 月に帝京大学八王子キャンパス内に開館した博物館です。
帝京大学の持つ貴重な学術資料や最新の研究成果を、展示や講座などを通じて社会に広く公開しています。どなたでも入館できます。ぜひお越しください。

- Web サイト：https://teikyo.jp/museum
- Twitter（@Teikyo_Museum）：https://twitter.com/Teikyo_Museum
- Instagram（@teikyo_museum）：https://instagram.com/teikyo_museum/
- YouTube：https://youtube.com/channel/UCFAxF_ST2oZoyFkrc3SfU-Q

溢(あふ)れんばかりに咲き誇る南沢あじさい山のアジサイ（写真は 2020 年 7 月 5 日あきる野市撮影）

特集

多摩で発見、「みち」の冒険

08 不思議をめぐる冒険
「日野市にあるかくれ穴公園」を見つけて

10 山と道を歩く
多摩よこやまの道と小山田緑地

14 南沢あじさい山の魅力
色とりどりの自然溢(あふ)れる

18 猫と共に歩む道

22 #たまスケートボード

26 五日市鉄道の廃線めぐり

32 野猿をたずねて

38 防人が歩いた道
特別寄稿

40 雑木林のスライムの正体
キャンパス自然観察だより

42 ミコタマ通信

43 編集後記

今号の取材場所

1 かくれ穴公園
日野市程久保１-23-11

2 多摩よこやまの道　多摩市南野
小山田緑地　町田市下小山田町 361-10

BOARD SHOP
ヶ丘 1-1-5

4 Necomaru Stand
多摩市百草 1146-1

3 南沢あじさい山
あきるの市深沢 368

今号の取材マップ

＊イラストは取材場所のおおよその位置を表しています。

7 野猿街道

6 五日市鉄道

5 PASTiME BOA
八王子市絹ヶ丘1

特集のテーマは「みち」
「みち」と聞いてなにを思い浮かべますか？
「道」でしょうか、それとも「未知」でしょうか。
なんだか言葉遊びみたいで面白いですよね。
「道」から連想されるものは何でしょうか。
単に「道」という意味にも捉えられるし、
「人生」という意味の道、人類が歩んできた「歴史」
という意味での道などなど。
今号の特集では、部員たちが自由な発想で
「みち」をつづります。
さて、どんな「未知」の発見があるのでしょうか。

南沢あじさい山から続く登山道（2020 年 7 月 5 日撮影）

不思議をめぐる冒険

思議をめぐる冒険

～日野市にある「かくれ穴公園」を見つけて～

何かをするとき、頭を使うだけでは限界があると私は思っている。普段の生活の中でも、頭と一緒に体を使っていることが多いだろう。だから考えるときには頭だけではなく、「足」も一緒に使うのが良いと私は考えている。著名な作家や作曲家の中には、「足」を使ってアイデアを捕まえてきた人もおり、「足」を使うことの大切さを思い知る。今回はそんな考えをめぐらせながら歩く「散歩」がテーマだ。

▲かくれ穴公園までの小道。すぐ近くを京王線が通る

散歩について

散歩とは単なる移動ではない。「散策」に「歩く」で散歩と書くように、気の向くままに歩くのが散歩である。だから散歩においては特に目指す場所も道もないし、ただただ魅力のある道に出会うまで歩くだけである。しかし、それだけでとても楽しいのだから、散歩とは不思議だ。

散歩には王道がない。もちろん流行りの散歩道や観光地を歩くこともあるが、それは散歩の一つでしかない。私は人通りの多い、大きな道では疲れてしまうし、人のことはあまり考えないで歩きたい。あるいは何も気にせず、好きな道を楽しみたい。それをどこまでもできるのが散歩であり、それこそが散歩の醍醐味だろう。

何気ない道も、好奇心をくすぐり、私を知らないところへ運んでしまうことがある。なんて素敵なことだろう。

何もない道

「この道（たとえば通学路）は何もないから退屈だ」と話す人がいた。

しかし、何もない道なんてどこにもない。通学路であっても道を歩けば多くのものが落ちている。それは珍しい動物だったり、人の歴史や生活だったり、大きな発見や小さな不思議だったりするけれど、どの道にも何もないことはなかった。だから「あるものをしっかり見ていないだけなのだ」と私は思う。

道にあるものをしっかり見つめて歩くことでしか見えないものがある。どんな道にも何かしらの歴史があるからだ。大きな道にはあまりに有名な人の歴史があることが多く、それは今でも残っている。しかし小さな道の庶民の歴史は知られていないことが多い。そのため、多くのものを残した道でも小さな道においてはなかったことにされやすい。こうした扱いを見たとき、私のような庶民が

いなくなった100年後、一体どんな扱いを受けているのだろうかと想像してしまう。私が道に残したちっぽけな歴史など、なかったことにされているかもわからない。

見つけたもの

ある日、私は散歩をしていた。その日は非常に天気が良く、遠くからは少年野球の声援が聞こえてきた。

例によって、私はワクワクする方へと歩みを進め、楽しんでいた。すると、程久保（ほどくぼ）駅付近で興味深い公園を見つけた。「かくれ穴公園」という公園で、公園自体が隠れているかのようにひっそりと存在していた。公園の中には謎の動物を模した遊具のようなものがあり、不思議な雰囲気が漂っていた。立て看板には、「源義経が奥州へ逃れる際に、この付近にあった隠れ穴に隠れた伝説が残っている」と記されている。

義経が都を追われ、奥州に逃れた際に用いたルートは今でも判明していない。しかし、鎌倉には敵対していた源頼朝がいたため、義経は北陸道を使用したのが一般的とされている。私はこの矛盾に疑問を感じ、調べることにした。

かくれ穴公園

調べた結果、この「隠れ穴」が地下式坑（ちかしきこう）と呼ばれるものであることが分かった。地下式坑とは諸説あるが、墓や倉庫の機能、または戦が勃発した際に家財道具とともに隠れる機能を持った穴のことをいう。なお、かくれ穴公園付近にあった地下式抗は、現在残されていない。

▲公園の内にあった謎の動物を模したもの

そしてこの地下式抗が、公園の付近（日野市平山）に拠点を置き、源平合戦では義経に従軍した武将「平山季重（ひらやますえしげ）」と結びついた可能性があるらしい。確かに、平山季重の存在の大きさは、平山城址公園や平山季重神社の名前などからもうかがえる。そのため、義経と関係があった平山季重と地下式抗という穴によってここに「かくれ穴伝説」がつくられ、地下式抗は義経の隠れた穴とされたのだ。

▲かくれ穴公園入り口。左に立て看板

義経の伝説としてここに「つくられた」からには、義経はそれだけ魅力的な人として扱われていたのだろう。そして、そんな魅力的な人がここに来たのだという話が今にまで残っているという事実は、なんだか地元に誰もが知っている有名人が来たと知って嬉しくなる気持ちに似ていて、親近感を覚えた。そう考えると、そんな思いを心に持ちながらここにかくれ穴伝説を残してきた地域の人が、なんだか愛おしい存在に思えた。

＊＊＊

義経が本当に来たのかどうかはさして重要ではないだろう。むしろ彼らがかくれ穴の伝説を残したこと、そのことに意味があると思う。そして今後もその思いを継承していくことが大切である。

加藤 直樹（心理学科3年）＝文・写真

〈参考文献〉
清野利明「日野市程久保発見の「義経の「隠れ穴」の残影ー「地下式抗」の機能を予察する」『民具マンスリー』41巻12号 1003ー10014頁（2009）

山と道を歩く

～多摩よこやまの道と小山田緑地～

小山田緑地本園見晴広場より。関東の富士見百景に選出されているが、この日は残念ながら富士山は見えず

多摩の尾根道

多摩丘陵の尾根道である「多摩よこやまの道」とそこに隣接する「小山田緑地（おやまだ）」を訪れた。「尾根」とは山頂と山頂を結んだ連なりのことを言う。すなわち、尾根道とは山で最も高い部分が連なっている道だと言えるだろう。

私は、このような山道を歩いた経験があまりなかったので、取材場所を探していたときに、ふと、どんな道なのかなとこの場所が目に止まった。そして、よこやまの道がここ多摩に存在する尾根道であるということで非常に興味が湧き、歩いてみたいと強く感じた。

そこで、よこやまの道を、編集部メンバー数人と共に歩いてみることにした。一人、二人で行う取材とは異なり、大人数で行うことでまた新たな経験ができた。

〝未知〟との遭遇

5月末頃、バスと徒歩でよこやまの道に赴いた。初夏の陽気で少し歩くだけでも暑さを感じ、道の入り口に着いた時には既に少し汗ばんでいる程であった。大妻女子大学多摩キャンパス付近からよこやまの道に入り少し進むと、そこには青々とした木々が生い茂り日陰を作り出していた。足を踏み入れると、一瞬にして涼しい風が流れ込んで、感動すら覚えるほどだった。鮮やかな緑色に包まれながら風に吹かれる瞬間は非常に心地良かった。同行したメンバーからも「日陰が多く歩きやすいね」という感想をもらった。

さらに少し先に進んだところには、木々の緑の間から差し込む光が地面に降り注いでいた。これにより作り出された影とのコントラストはとても美しかった。

風が吹き、そこに落とされていた光がゆらゆらときらめく美しい風景

を見たときには、心が洗われるような思いがした。暑さと空、木々のそれぞれが夏の到来が近いことを私たちに知らせているようだった。

よこやまの道到着直後にあった道の様子　歩き進めると木の影が増える

緑のトンネルと人々

山道を歩いていると、目の前を覆う新緑の密度がどんどん大きくなっていった。始めは整備された道であったが、進んでいくうちに、舗装されていない、木々が横からも生い茂る道となった。このような道に至る頃には、辺りを覆う木々は周りを全て囲み、トンネルとも言える状態へ変化していた。

ここまで来ると、道を訪れている人とすれ違うことが、歩き始めた時より増えた。そして「こんにちは」とあいさつをしてくださる人もいた。赤の他人同士でも、さりげないコミュニケーションを交わせるのが嬉しかった。同行したメンバーからも、「あいさつから温かみを感じた」という感想をもらった。

この長く続く木々のトンネルは四方を囲むもので、時には太陽の光がほぼ遮られ、暗くなることもあるほどの場所。まるでジブリ映画のワンシーンのような風景を多く見ることができ、気分が非常に高揚した。渋谷や原宿のような都心部ではないとはいえ、首都である東京に、このような場所があることに驚いた。

〝道〟との遭遇

道中、分かれ道が現れた。予定ではこのままよこやまの道を進むはずであったが、誤って小山田緑地へとつながる道を進んでしまった。小山田緑地とは、東京都町田市に位置する緑地公園だが、その誤りに気がついたのはしばらく歩いてからのことだった。これから引き返してもよかったが、「未知」を選ぶのも楽しそうだったため、あえてこのまま進むことにした。

小山田緑地を歩いていくと、初夏にトンボが産卵にやって来るというトンボ池に辿り着いた。トンボ池の上には、歩行者用に木道が整備されていた。この木道にはたくさんの赤い実が落ちていた。頭上で生い茂る木々には、小さな黒色の実がいくつもなっていた。

トンボ池では、木の実を見ている人や、池の近くで遊ぶ親子の姿があった。近くにいたおじいさんが、なっているのは桑の実だと教えてく

トンネルのような木々の先に見える光

ださった。またトンボ池のお話もお聞きした。お話によると、昔その近辺では養蚕が盛んに行われていたそうだ。そのため、蚕の餌となる桑が、今も多く残っているということだった。また、桑の実は甘く、食べることができるとすすめてくださった。

実際に食べてみると、一粒だと味は薄かったが、かすかに甘さを感じた。プチプチした食感で柔らかく、口の中ですぐになくなってしまった。ちなみに実が大きいものほど、美味しいそうだ。

気づくと桑の実で手が濃いピンク色に染まっていた。すると、近くにいた子どもを連れたお母さんが、慣れたようにウェットティッシュを差し出してくださった。気軽に訪れた道でのこのような貴重な体験と、そこで出会った親切な方々との出会いにとても感謝している。

発見した紫色の桑の実

メンバーの一人は、別のおばあさんにも多くの話を聞いていた。教えてくださった内容によれば、桑の実は上の方になっているものほど大きいこと、黒色のものが熟していること、そして、手で取っても実が崩れない程度のものが食べごろということだった。加えて、一個だけでなく、四、五個食べると味がよく分かるのだそうだ。

歩き続けた先の光景

初夏の陽気の中、歩き続けた先で開けた場所に出た。そこには見晴台があり、広大な景色が一望できた。「みはらし広場」と呼ばれる場所である。そこからは森や住宅街が一望でき、さらに奥の山々までも望むことができた。頭上には澄んだ美しい空が広がっていた。暑さで疲労も溜まっていたが、そんな疲れを忘れるほどの爽快さを感じる、美しい光景だった。

近くには、みはらし広場の南西の景色が、国土交通省が定める関東の「富士見百景」に選ばれていることを示す石碑が建っていた。取材日は雲がかかっていて残念ながら見ることは叶わなかったが、雲が少なく澄んだ晴れの日には壮麗な富士山を見ることができる。この日にはウェディングフォトを撮影している新婚夫婦もいた。この場所に思い出があるのかもしれないが、それほど大事な撮影に使われるくらいの美しい景色でもあるということだろう。

木陰にベンチが設置されていたので、少し休憩をした。みはらし広場は風を遮るものがあまり無く、吹き抜けるそよ風は疲れた私たちにとってはより気持ちの良いものだった。

取材を通して

今回は、よこやまの道と小山田緑地の一部、約6キロの道のりを歩いてみた。時間に余裕を持ち、自由に取材を行うことで心赴くまま純粋に「未知」を体感することができた。道中で誤って小山田緑地に迷い込んだ形になってしまったが、このような出来事こそ、未知の場所を訪れた際の醍醐味なのかもしれない。

ただ、私自身、準備や下調べ不足で至らない点が多々あったことは反省している。また、道中で出会った人たちや編集部メンバーに助けられることも多く、今回は助け合いの大切さも改めて味わった。多くの貴重な体験を通して、知らない場所を訪れ、飛び込んでみることで得られる学びがあることもよく分かった。

＊＊＊

行ったことのない場所での人との出会いやコミュニケーションから、自分の知らなかった新しい情報を得

ることができた。さらに、起きたことに身をまかせることで、結果的に良いものを得ることができた。

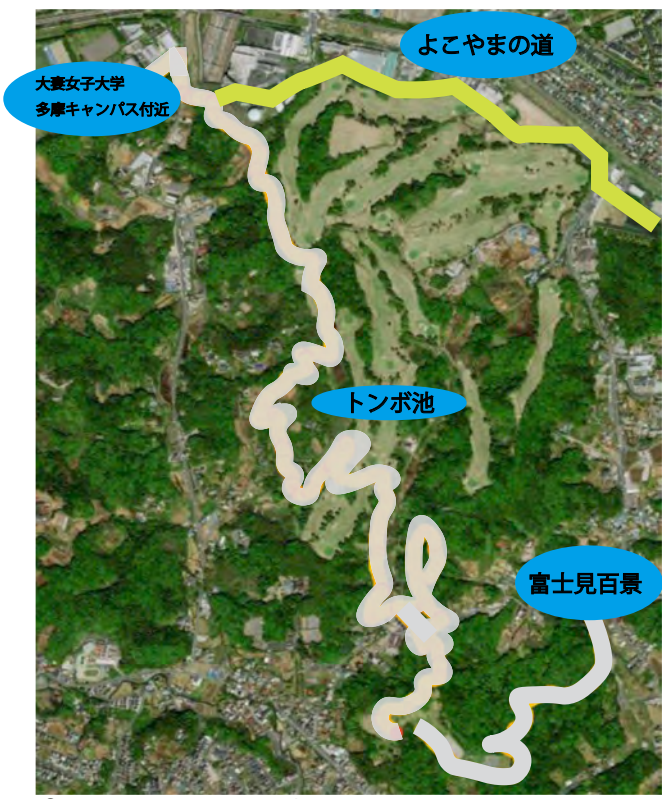
なじみのない場所であいさつを交わすことができたように、ささやかな交流ができることが非常に嬉しかった。あいさつ自体は毎日当たり前のようにすることだが、それを赤の他人である私たちにしてくれたということに心が温まった。このような温かい交流を普段からたくさんできるように心掛けたい。

未知へと足を踏み出す行動は、高揚感とともに多少の不安や恐怖を伴うことが多いと思う。しかし、一歩踏み出してやり切ってみると、知識や学びの積み重ねができることをあらためて理解した。この経験を生かして、これからの人生でも恐れず、様々なことを経験していきたい。

下坂 愛梨紗（心理学科2年）
＝文・一部写真

編集部の同行メンバー
上原 有響（外国語学科3年）
カン ミンジョン（日本文化学科3年）
荒井 涼花（史学科2年）
祝 ちとせ（人間文化学科2年）
山﨑 柚夏（史学科2年）

富士見百景に選ばれていることを示す石碑と、見える山の説明をする看板



©OpenStreetMap contributors
www.openstreetmap.org/copyright

今回歩いた道のり

富士見百景を見た位置から後ろを向いたときに広がっていた景色

色とりどりの自然溢(あふ)れる
南沢あじさい山の魅力

1万5千株のアジサイが咲き誇る南沢あじさい山（2020年7月5日撮影）

薄紫や薄ピンクの淡い色が印象的な梅雨の代名詞アジサイ。あきる野市に、じめじめした気持ちも吹き飛ばしてくれる、アジサイが咲く山を見つけた。それは、あきる野市深沢にある、「南沢あじさい山」だ。アナベルやダンスパーティーなど、南沢あじさい山には約1万5千株のアジサイが植えられている。そして、その色とりどりのアジサイはここにしかない輝きを放っている。あじさい山は4月には花桃や桜の育成にも力を入れている。今回、30年間一人であじさい山を守ってきた南澤忠一(みなみさわちゅういち)さん、娘の森崎和江(もりさきかずえ)さん、あじさい山の活動を支えている株式会社do-moの責任者南嶋祐樹(みなみしまゆうき)さんにお話を伺った。

あじさい山の物語

あじさい山は「旧盆にご先祖様のお墓があるところまで花の中を通っていきたい」と南澤さんが思い、庭先にあった二株のアジサイを、バラバラにして挿し木をしたのが始まりだった。

アジサイが増えるまでに掛かった時間は10年。最初はただ先祖供養のために始めた活動だったが、山に来る親戚や知人にアジサイを綺麗と褒められたのが嬉しくて、それ以降も花を育て続けた。あじさい山が始まってから53年、南澤さんは後継者問題で悩んでいたが、現在は南嶋さんがあじさい山を支えている。

色とりどりのアジサイ (2020年7月5日撮影)

今年のあじさい山の状況

私は6月に取材に赴いたのだが、今年のあじさい山の状況を南嶋さんに伺うと、「今年はまだ四割五分しか咲いていない状況。まだ微妙に蕾が開ききっていない」と苦笑いしながら答えてくれた。アジサイの開花状況には冬の雨量が関係しており、新しい芽は、1月に降った雨を蓄えて育つ。しかし、今年は、例年に比べて雨量が少なかったため、まったく花芽(はなめ)が育たず、枯れこんでしまった。さらに、咲く直前に害虫被害に遭う株が多かったのも、開花状況が芳しくない原因の一つである。古い茎の上に伸びる緑色の新鮮な茎は害

白い花びらがかわいいアナベル

虫の大好物。茎を食べる虫もいれば、茎の中に卵を産む虫もいる。食べられてしまった茎は剪定（せんてい）をするしかなくなり、株も小さくなってしまう。

南嶋さんはこの状況に対し、「今年は花芽がない分、裏を返せば来年は期待できるんじゃないかな。どの植物にも言えることだけど、良い年もあれば悪い年もある」と話した。来年のあじさい山の開山が待ち遠しくなった。

アジサイについて

南沢あじさい山のアジサイは、あじさい山の入り口から少し歩いた場所にある畑で増やし、山に返している。基本的に挿し木という方法で栽培しており、山に直接挿し木してもいいが山に生えている雑草の方が大きく育ってしまうため、ある程度畑で育てる必要があるそうだ。

南嶋さんにあじさい山の中で特に育てるのが大変な品種は何か尋ねると、アナベルという種類が特に繊細だと教えてくださった。アナベルはアジサイの中でも遅咲きで、白くて小さめの花びらがとても可愛いのが特徴である。

自然の甘さが引き立つお茶

あじさい山の受付で配られているあじさい茶は、自然の甘さが引き立つあじさい山のオリジナルドリンクである。

南嶋さんにあじさい茶の作り方を伺うと、「原料はあじさい山で栽培している甘茶で、甘茶はアマチャヅル科でアジサイの仲間なんです。あじさい茶に使うガクアジサイは、まず、お茶に使うため花芽を取ります。花芽を取ることで、花に養分が行かずに、葉に養分が行き、その葉を発酵させ、出来たお茶っ葉に地元のユズを絞って出た果汁を染み込ませることで、自然の甘さと柑橘（かんきつ）の爽やかな味が出るんです」と丁寧に話してくれた。

紅茶のような味わいのあじさい茶

あじさい茶には、抗アレルギー作用や抗菌作用、リラックス効果、抗酸化作用、口臭予防効果などがあり、身体にも優しい。私も受付であじさい茶をいただき、飲んだ瞬間、口に広がる甘さに驚いた。あじさい茶は購入することもできるので、あじさい山へ来た際はぜひ飲んでみてほしい。

山を支え続けた南澤忠一さん

今回、あじさい山を始めた南澤忠一さんにお話を伺うことができた。忠一さんは御年92歳になるが、とても元気で笑顔が素敵な方だった。

忠一さんは、40代の時あじさい山を始めて、それから約30年間、朝から晩まで時間をかけて一人で山を支えてきた。しかし、70代に突入した頃に体力面で辛くなり、二人の弟さんが手伝うようになった。そんな忠一さんの作業する時におすすめの椅子は一升瓶の入る箱だそうだ。

南澤さんにお話を伺うなかで「アジサイのことは土地に教わり、アジサイの手入れもアジサイに教わる」という言葉が印象に残った。アジサイに向き合い、適した土地を探し、植えていくことはアジサイを愛する忠一さんだからこそできることだろう。

「何歳まで作業をしたいですか」と忠一さんに伺ったところ「生きているうちはずっと作業したい」と強く語るのを聞いて、南澤さんのあじさい山に対する愛を一層強く感じた。

忠一さんの笑顔が輝く３ショット

あじさい山のキャラクター

あじさい山を歩いていると、いたるところで鉛筆の形をしたキャラクターに出会う。「このキャラクターは何ですか」と南嶋さんに伺うと「ＺＩＺＩ(じいじ)」と教えて頂いた。

忠一さんによると、ＺＩＺＩというキャラクターは、あじさい山がある深沢という地域の案内人で、あじさい山の近くにある「深沢小さな美術館」の館長である友永昭三（ともながあきみつ）さんが自身の作品であるＺＩＺＩを寄付してくれたということだった。

また、あじさい山には花山ちゃんという山の形をしたオリジナルキャラクターもいる。花山ちゃんは頭の上にアジサイが咲いていて、とても可愛らしい。あじさい山に来た際には要チェックだ。

いつも見守る案内人 ZIZI

あじさいのドライフラワー

あじさい山といえば、南澤さんの娘である和江さんの、手作りのアジサイを使ったドライフラワーは欠かせないだろう。

あじさい山の入り口の近くに、ドライフラワー工房ｃａｚｕｅがある。中には大小さまざまなドライフラワーが飾ってあり、一つひとつに和江さんの優しさが込められている。

ハート形のかわいいアジサイリース

ドライフラワーのリースは、ワイヤーなどを一切使わず、あじさい山で採れた木の枝やアジサイのみで作られた飾りである。リースを購入し、楽しんだ翌年以降に工房に返すとあじさい山の土に還してくれる。その際に、南沢あじさい山の入場券のプレゼントも貰えるので皆さんもお土産にいかがだろうか。

今後のあじさい山

「あじさい山を守るために何かしていることはありますか」と質問すると南嶋さんは「アジサイのシーズン以外の活動を支えるボランティアの募集や、春を盛り上げる植物として花桃やミツマタを推していきたい」と話してくださった。

実際に今年の3月からはあじさい山のシーズンオフを支えるボランティアの活動が行われており、20人も集まったそうだ。あじさい山は南澤さんをはじめとした多くの方々の力があったからこそ、今年も無事に開山することができたのだろう。

＊＊＊

今回、あじさい山を支えている人達のお話を聞かせていただく中で、皆さんのあじさい山に対する思いを感じる瞬間が何度もあった。

私自身、南沢あじさい山に取材に行く前までは、アジサイはあまり手をかけなくても育つものだと思っていた。しかし、実際は毎日天候をチェックしたり、環境を整えたりしなければ、しっかり育たない繊細な植物だということを南嶋さんに教えていただいた。自然に向き合うことは大変で、覚悟のいることだと知ることができた。

あじさい山は、自然に溢（あふ）れていて、澄んだ空気が疲れた心を癒してくれる素敵な場所だった。

山﨑柚夏（史学科2年）＝文・写真
荒井涼花（史学科2年）＝写真
甲田篤郎（帝京大学総合博物館）＝写真

来年に向けて育てている差し木の苗

忠一さんの畑。その名前からは忠一さんのユーモアが感じられる

猫と共に歩む道

私の実家では現在、子猫を飼っている。その子の母親は野良猫であった。そのことから、野良猫を保護する場で活躍している人に興味を持った。そこで、私たちは「おやつ」で保護猫・地域猫活動を広めるお店、「Necomaru Stand」でお話を伺った。

「Necomaru Stand」の入口看板

おやつがきっかけになったら

多摩センター駅から京王バスに揺られ、「愛宕東（あたごひがし）」で降りて歩くこと約6分。住宅街に囲まれた道を抜けると「OPEN」と書かれた赤紫色の旗が見えてくる。近づいてみると徐々にお菓子の美味しそうな匂いがふんわりと香ってきた。『ねこ』が好きな『まる』やまのお店、ということで『Necomaru Stand』という名前にしました。」そう笑顔で語ってくれたのは店長の丸山真衣（まい）さん。丸山さんは府中市を中心に活動するNPO法人、「府中猫の会」の一員として活動し、今年の4月からこのお店をオープンした。なぜ「おやつ」で始めたのかと尋ねると、丸山さんはその理由の一つに、おやつには「親和性」があるからだと言う。「猫に興味のない人でも、おやつには手を伸ばしますよね、きっと。誰にとっても身近な『おやつ』が保護猫活動を知るきっかけになったら嬉しいし、（お店の）売上金がそういった猫たちの暮らしを支える助けになればと思い、おやつ屋さんを始めました。」

その言葉を体現するように、取材中にも二組のお客さんがお菓子を求めて訪れていた。そのうちの一人である男性客は、前からお店の存在は知っていて、今回は散歩のついでに来店されたという。もう一組は前にも訪れたことがあるという親子の姿だった。どちらも猫を求めての来店ではなかったが、美味しいおやつに惹かれていらっしゃったのだろう。

カドキッチン多摩との出会い

いざお菓子を販売しようと思い立っても、お店を開くまでにはさまざまな苦労があったと丸山さんは語ってくれた。お菓子を売り物として販売するには「菓子製造許可」が必要になり、さまざまな基準を満たしたキッチンが必要になる。そこで丸山さんはシェアキッチンを探すことにしたが、なかなかうまくはいかず、3カ月程かけてようやく見つけたのが現在出店している「カドキッチン多摩」だったのだ。

家で20回くらい試作して（笑）

続いて現在販売しているおやつについて、その製作秘話とそれぞれに対するこだわりを伺った。

一品目は繊細な温度管理や小麦粉の配分量が求められ、製作がとても難しい「カヌレ」。いくら気をつけ

「Necomaru Stand」のおやつたち

ても焼きムラができてしまう時もあるというそのカヌレは、こだわりだらけの品だそうだ。「家で20回くらい試作して（笑）」と教えてくれたが、その回数を聞いて、丸山さんがいかにこだわり抜いているのかを知った。気になる中身のモチモチ食感については企業秘密だそうだ。

二つ目はお店で最も売れているネコ型で可愛らしい「フィにゃんシェ」。香りにこだわるために発酵バターを使用し、こちらもカヌレと同じように、自分の理想とする食感のために小麦粉の配分量を何度も試作し見つけ出した。

三つ目は「スパイスバナナケーキ」。最後の最後に作ろうと思い立ったというこのおやつは、丸山さん好みのスパイスを使ったおやつを作りたいという思いから製作された。そんなスパイスにはオールスパイスを使用している。

底で出会った猫への恩返し

順風満帆に保護猫活動をしているように見える丸山さんだが、猫に出会うまでの人生は波乱に富むものであった。丸山さんが府中猫の会でボランティア活動を始めたのは2020年の6月頃のこと。当時高校の教員だった丸山さんは、ハラスメントを受け適応障害になってしまい、家にこもってしまう日々が続いていた。そんなときにたまたま出会ったのがNPO法人、府中猫の会が運営するYouTubeチャンネル、「ちゅー猫チャンネル」だった。そこで「地域猫の餌やりさんを募集しています」という情報を見つけ、活動に応募したのだという。

ボランティアを始めた頃は適応障害によるうつ病に陥ってしまい、丸山さんは自らの命を投げ出すことも考えていた。そんな中、毎日餌を与え、少しずつ心を開いてくれる猫と触れ合い、いつしか「この子たちのために生きてみようかな」と思うようになったと語ってくれた。そして力強く、こうもおっしゃった。「猫たちは、私にとって命の恩人です。だからこそ、今度は私が猫たちの命や暮らしを守りたいのです。」

府中猫の会の活動

丸山さんが所属する「府中猫の会」は府中を中心に活動している団体で、「できる範囲で活動をやろう」を心がけている。そして丸山さんはその中でも餌やりの担当をしており、日々活動している。また府中猫の会の活動の中には、野良猫たちの生活を守るための地域猫活動などもある。

野良猫たちには強い繁殖力があるが、そんな彼らがこの世界で生きていくのは難しい。もし野良猫たちが繁殖しすぎてしまうと、道路などでの事故の増加や野良猫の食糧不足に繋がってしまう。そういったことを防ぐために、大人の野良猫を一時的に保護し、避妊・去勢手術の後に再び地域に解放する。なぜ再び野生に放してしまうのかというと、やはり皆が可愛らしい子猫を飼いたがるために、大人の猫にはなかなか飼い手がつかないからだ。

そして丸山さんたちの活動はただ避妊や去勢手術をして終わりではない。彼らのその後の人生を保護するために餌やりや糞尿の清掃、地域の町内会長との話し合いなど、地域の理解を深めながら猫たちを守っているのだ。

こういった活動を総称してTNRと言う。TNRとは、Trap（捕獲）・Neuter（不妊手術）・Return（元の場所に戻す）の略で、日本ではTNR完了の目印として猫の耳先をV字にカットし、それを「さくら耳」と呼んでいる。私は耳をカットすると聞いて、猫たちに痛みなどの負担が発生するのではと思ったが、専門の獣医が麻酔を使っておこなうらしく、猫には害がないようで安心した。

丸山さんから読者の皆様へ

「猫ちゃんを飼いたいと思った人が真っ先に行くのはやっぱりペットショップだと思う。でもそのペットショップ以外にも保護猫たちがいるのだということを知って、その選択肢の一つとしてほしい。そして飼った猫を最後まで面倒を見てほしい。あとはおやつを買いに来てください！（笑）」

お話を伺って

私は道で猫を見かけたら餌をあげようと、常にかばんの中に猫の餌を持ち歩くほどの猫好きであった。しかし、丸山さんへのインタビューを通じて、私は私自身の行動を反省することになった。丸山さんたちの活動に対して、私の行動は「その猫たちの人生を最後まで背負う」という責任を考えていなかった。さらに、むやみに餌をやるだけでは周辺の住民たちに迷惑だということを認識するきっかけになった。これからは自分が責任の持てる範囲で、かつ地域への理解を深めるための行動をしようと思う。

また、私も猫を飼っている者として、このような活動をしている丸山さんや府中猫の会の皆さんをはじめ、地域猫を守る活動をしている人たちに対して尊敬と感謝の気持ちで満たされた。私は、これからも、「Necomaru Stand」を訪れ、猫について丸山さんと話したり、おやつを食べたりすることで猫を応援したい。

カンミンジョン（日本文化学科3年）
上原 有響（外国語学科3年）
＝文・写真

【多摩センター方面からお越しの場合】
京王バス「多摩センター駅」
南口５番乗り場から
【聖蹟桜ヶ丘方面からお越しの場合】
京王バス「聖蹟桜ヶ丘駅」
東口９番乗り場から
桜72または73系統に乗車
「愛宕東」で降りて徒歩約６分！
駐車場がありますので、
お車でのご来店も可能です！
（10月中旬現在は営業を休止中。
一刻も早い復活を心待ちにしています！）

NecomaruStandのチラシ
店のメインのおやつであるカヌレを抱いている猫は、丸山さんが担当している地域猫の「あーちゃん」。お店の運営をサポートしているイラストレーター「やわらか荘さん」のイラストで、猫がリラックスするときに行うポーズを参考に描いたそうです。イラストは全体的にふんわりとした温かい雰囲気を与えてくれるので、お店のイメージともマッチしていますね。

食べてみました！！

「フィにゃんシェ」・「カヌレ」・「スパイスバナナケーキ」

いちばん人気！「フィにゃんシェ」180 円▶

猫の姿をそのまま再現した可愛い外観も魅力的ですが、ふんわりした甘みと食べた瞬間、口の中に広がるバターの風味が、目と口を同時に楽しませてくれるおやつです。外は弾力がありながら、パウンドケーキのような柔らかさを持つのが特徴です。かわいさとバターの風味を同時に楽しみたい方におすすめです。

◀店長のおすすめ！「カヌレ」300 円

外はカリッと、中はトロトロ！このおやつは、キャラメルのような黒っぽい見た目とはうら腹に、中は柔らかく、甘いプリンを思わせるギャップを持つおやつです。香ばしさと甘さの２つの食感を同時に楽しみたい方におすすめです。

みんな大好き！「スパイスバナナケーキ」220 円▶

なめらかなバナナの甘さとスパイスの香りがたっぷりと詰まった、暖かい柔らかさとたまらない味を感じさせてくれるおやつです。紅茶やコーヒーのお供からお子さまへのおやつまで、幅広くおすすめします。

【幻の期間限定メニュー！？】

オープン当初は色々なメニューを出そうと期間限定のサクラのカヌレを出したりしていたが、一人で全てのお菓子を焼くとなると手が回りきらない部分があった。夏限定メニューも考えていたが、まずはスタンダードな三つのメニューを安定して提供することを優先し、今に至る。本当はやりたい気持ちがあるとのことで、もしかしたら季節限定メニューの復活もあるのかも……

左から「丸山さん」と「やわらか荘さん」

営業情報は下記の Instagram のアカウントに投稿されます。一度ご覧になり、営業状況を確認した上で足をお運び下さい。

お店の Instagram はこちら

#たまスケートボード

「ここ最近で人気が上昇しているスポーツを三つ挙げてください」そう問いを投げかけられたとき、その一つとして「スケートボード」と回答する人は少なくないであろう。

その主な要因に２０２０年東京オリンピック（開催は２０２１年）でのスケートボード競技での出場選手の活躍がある。男子では堀米雄斗選手が金メダル（ストリート）を獲得し、女子でも四十住さくら選手（パーク）・西谷椛選手（ストリート）がともに金メダル、開心那選手が銀メダル（ストリート）、中山楓奈選手が銅メダル（ストリート）を獲得と、日本代表選手の活躍が顕著な大会であった。その活躍こそが人気をさらに押し上げた土台であり、経験者、未経験者関係なく人気を沸騰させたのだろう。

そこで今回は、そんな注目されているスケートボード（以下スケボー）にスポットライトを当て、多摩地域におけるスケボー事情を多方面から切り取り、それらを見ていきたいと思う。

スケートボードのイメージ

まず、スケボーに対するイメージを帝京大学八王子キャンパス内で聞いてみた。すると「スケボーをしている人のファッションがカッコいい」、「スケボーそれ自体に憧れを持っている」、「近年人気が高まっているスポーツ」などのポジティブな意見が少数で、「柄が悪い人が多いイメージ」、「（学内で滑っている学生を見たことから）承認欲求が高そう」、「はじめての人には他のスポーツと比べ、ハードルが高そう」などのネガティブな回答が多かった。また、今回の調査では挙がらなかったが、テレビや新聞等のメディアで度々報道されている街中をスケートボードで移動するクルージングと呼ばれる行為が社会的に問題視されている。

スケボーは、１９４０年代にアメリカ・カルフォルニアで生まれたとされており、現在でも本場として知られている。自由で開放的な雰囲気があふれるカリフォルニアではステ※アやハンドレールなどがある難易度の高い路上を滑ることが好まれ、開放感を味わうためのスケーターも多い。そのため地域住民はスケボーに対して寛容である。そのスタイルに、ここ日本においてもプロ・アマチュア問わず多くのスケーターがあこがれている。しかし文化の違いは大きな壁を生む。現状では、スケボーは日本においては受け入れられがたいのかもしれない。そこで重要となるのが、スケボーをすることができる環境の整備や、そこに根ざした文化を支えるコミュニティの存在である。

環境整備

では、多摩にはどのくらいスケートパークがあるのだろうか。現在、合計10ヵ所ものスケートパークがある。これは全国的に見てもかなり環境整備が進んでいると言えるだろう。例えば私の地元である千葉県印西市には、設備が整ったスケートパークは2ヵ所しかしない。

今回その多摩地域のスケートパークの一つ「たちかわ中央公園スケートパーク」に足を運んでみた。IKEA や GREEN SPRINGS の真横

※ステア：　英語で stair(階段) のこと
　レール：　階段などの手すり、または手すりを模したスポーツ用具のこと

にあるため立地が良く、規模としては大きくはないものの実用性の高いセクションが多くあり、使いやすいパークという印象を受けた。では、実際使用するローカルスケーターたちはどのように感じているのだろうか。そこで、取材日にパークを利用していたスケーターに話を聞いてみた。すると、「正直、他のパークと比べて狭いですね。でも個人的には雰囲気が好きです」（20代男性）、「狭い範囲にセクションが多くあるので、フラットトリックを練習している初心者には難しい印象です」（20代男性）などの声が聞かれた。

たちかわ中央スケートパーク
（立川市緑町 105-3 多摩都市モノレール高松駅南側）
スケボー、インラインスケート、BMX で利用可能

コミュニティ

次にスケートボードシーンでは欠かすことのできないショップ、つまり、「コミュニティ」はどのくらいあるのだろうか。

現状、多摩地域には確認できるもので10店舗のコミュニティがある。その中にはムラサキスポーツやインスタントなど、有名なショップもある。今回は京王線・北野駅中央南口から徒歩で約10分、八王子市絹ヶ丘にお店を構える PASTiME BOARDSHOP オーナーの田栗賢二（たぐりけんじ）さんにお話を伺った。

※一部の道を省略しています

INTERVIEW
田栗賢二さん / 元プロスノーボーダー PASTiME BORDSHOP オーナー

▲お店の外観

店名の「i」が小文字のワケ

PASTiMEという名前には、趣味や・遊び・気晴らしといった意味を持つ、英単語の「pastime」のように「拘束のない自由」を感じてもらえる場所にしたいとの願いが込められている。「i」が小文字である理由を伺うと「ロゴのデザイン案を田栗さんがプロだった頃にお世話になった先輩にお願いしたところ、いくつかの案の中で最もバランスが良く感じたデザインの『i』が小文字だったためだ」とおっしゃった。

始めたキッカケ

スケボーを始めたキッカケは中学生の頃のスキー教室だったそうだ。仲間内で「カッコつけたい」という思いで様々なウェアカタログを見ていくうちに、スノボーが好きになったという。そこで両親にお願いしたところ、住んでいる場所が東京だから頻繁に行くこともできなければ、価格も高いという理由で断念することに。その時、友人がスケボーをやっており、「似てるな」という軽い気持ちでスケボー人生がスタートした。「気持ちはスノボーなのにスケボーから入ることになった」と田栗さんは当時の感覚を表現している。多くの人は何か新しいことを始めようとするとき、少し身構えてしまうが、軽い気持ちで気楽に始めてみれば案外長続きもすることがある。気楽に考えて取り組む方が良いこともあると、田栗さんの物事に対する思いの内も聞くことができた。

▼ご自身の経験を振り返る田栗さん

アマチュア時代の思い出は？

アマチュア時代の思い出を聞くと田栗さんは、「昔、多摩センター駅前にあった室内ゲレンデ『カムイ多摩』での4年間だね」と即答した。そこで開催された大会で優勝し、21歳の時に初めてスポンサーがついたという。そこから様々な大会に出場する度にブーツやグローブ、ウェアなどをいただけるようになり、24歳にして、お金をいただくようになったため、職業として確立したという意味でのプロの活動ができるようになった。その土台となるものが全てそこにあると語る田栗さんはとても輝いて見えた。

PASTiMEの強み

田栗さんによればPASTiMEの強みは「根強いコミュニティ」、「アフターフォロー」、「それらに伴うサポート力」だという。実際、田栗さん自身もプロとして活躍していたとき、ショップの存在は大きな支えだったそうだ。同様に、この店も「この場所がなければダメだ」とお客さんに感じていただけるような存在であり続けたいと語った。そして、そういう意味では「目に見えないつながり」が強みの一つかもしれない、と笑顔で付け加えた。

レッスンを始めたワケ

元々、メインでスノーボードを扱っており、レッスンもスノボーからだったという。昔は頻繁にマイクロバスで様々な場所に近所の子どもたちを連れて行き、滑っていたそうだ。そのなかで田栗さん自身も多くを学んだという。「一人ひとり苦手なことは違うし、そのトリックが出来ない根底にある理由も異なる。直接会って伝えることのできる環境があるからこそ適切なアドバイスをすることができ、かつその面白さも体感できる」そうだ。

現在、確かにYouTubeなどで様々な方がハウツー動画を投稿しているが、直接教えられるに越したことはないだろう。

▲店内の様子

▲冷房完備、3種類の室内ランプ

今後の目標

最後に、田栗さんの今後の目標を伺った。

「当たり前のことですが、今後もお店に足を運んでくれるお客さんをメインに据えたサービスを続けたいと思っています。最近のPASTiMEは子ども向けのレッスンをやっていることもあり、その割合が増加してきました。ですが、昔みたいに多くの大人も楽しめるイベントなども企画していきたいと考えています。常にローカルである『多摩』のニーズに合った形に進化し続けたいです」

取材を終えて

取材を通し、多摩におけるスケボーに対する関心は、かなり高いように感じた。今後、競技人口は現時点に比べ、はるかに増加するであろう。そういった時勢の下に生きる若い世代から未来のメダリストが生まれることは、そう遠い話ではないと思う。当たり前のことだが、今回紹介したものは、スケボーのほんの一部に過ぎない。根底にはより深いストーリーがある。本記事をそこに興味を持った人々のキッカケづくりとして捉えていただきたい。

「ある」と「ない」「する」と「しない」

人生とは長いようで短く、短いようで長い。その不確かな期間の中で人々は常に取捨選択、多方向に分岐する「道」の選択を個人の意思決定でしている。今回取材したスケートボードはその選択の一つである。この機会に少しでも興味がある人は動画やファッション、音楽などその周りに繋がるどんな小さなものからでも、スケボーに触れる体験や、そこに見出される快感をぜひ味わってほしい。そう願っている。

阿部蓮太郎（経済学科3年）
＝文・写真

五日市鉄道の廃線めぐり

皆さんは、かつて「五鉄」と呼ばれる鉄道があったことをご存じだろうか。「五鉄」とは、現在のJR五日市線の前身にあたる五日市鉄道のことである。五鉄には、戦中に運行が休止され、戦後復活することなく廃止された区間があった。私は以前から廃線に興味はあったが、実際に廃線跡を歩いてみたことはなかった。五日市鉄道は私が住んでいる地域の近くにあったことから、実際に自分で歩き、かつてそこにあった鉄道の面影（おもかげ）を探してみることにした。

五日市鉄道とは

本題の前に、廃線となった五日市鉄道について解説しよう。

五日市鉄道とはかつて立川駅から武蔵岩井駅を結び、主に石炭輸送と旅客輸送を目的に設立された鉄道である。また、五日市鉄道の駅である武蔵田中駅から砂利専用線の五日市鉄道拝島支線が延びていた。その当時、貨物車両は従来からの蒸気機関車、旅客車両はガソリンカーで運行していた。

今回歩いた廃止された区間は、立川―武蔵上ノ原（むさし）―郷地（ごうち）―武蔵福島―南中神（なかがみ）―宮沢―大神（おおがみ）―武蔵田中―南拝島―拝島駅である。[※1]五日市鉄道は初めに拝島駅を起点に武蔵五日市駅までの11・1キロメートルが1925年4月21日に開業した。その後、五日市鉄道は南武鉄道（現在の南武線）と立川駅で接続することとなり、1930年7月13日、立川～拝島駅間を開業させた。1940年9月に南武鉄道と合併[※2]したが、1944年4月1日に戦時買収により国有化[※3]された。廃止された区間と

※１その後武蔵岩井駅が開通した
※２南部鉄道五日市線に名称が変更された
※３国有鉄道五日市線に名称が変更された

現在の地図と五日市鉄道の路線

ほぼ並行して青梅線が通っていたことや戦時輸送の効率化が求められたことから、同年10月10日限りで立川～拝島間は「休止」とされた。なお、「休止」としたのは終戦後復活を予定していたからだが、結局、立川～拝島間が復活することはなかった。

立川駅―武蔵上ノ原駅跡間

6月のよく晴れた日に、まず立川駅から上ノ原駅跡間を歩くことにした。

五日市鉄道は、立川駅では南武鉄道と同じホーム（駅の南側部分）を、そこから武蔵上ノ原駅までは南武鉄道の線路を共に使用していた。

この区間には、現在も使われている青梅短絡線と呼ばれる現役の路線がある。ここは、かつての五日市鉄道の名残を感じることができる数少ない場所の一つである。

武蔵上ノ原駅は青梅短絡線にある現在の「上野原踏切」付近に位置していた。そのため、上野原踏切付近から見ると、駅の位置をはっきり確認することができた（写真①）。

武蔵上ノ原駅跡―郷地（ごうち）駅跡間

武蔵上ノ原駅跡から郷地駅跡までの線路跡は、立川南通りになっている。途中にある残堀川（ざんぼりがわ）を渡り、立川南通りを西に進んでいくと、産業サポートスクエア交差点に差し掛かる。写真②の横断歩道から手前のビル付近が郷地駅跡である。

この駅は停留所として設置されていたが、駅の痕跡（こんせき）はなかった。もし、ここにかつて線路が通っていたことを調べていなければ、一生知ることはなかったのだろう。そう思った私は、一歩一歩かつての名残を探し、感じながら次の駅へと足を進めた。

郷地駅跡―武蔵福島駅跡間

郷地駅跡から武蔵福島駅跡へ向かう線路跡は住宅街となっている。当時の武蔵福島駅は、現在の昭和公園西側の福島通りに接し、停留所として扱われていた（写真③）。

①武蔵上ノ原駅　駅跡部分

③武蔵福島駅跡付近　正面道路が線路跡
左の建物付近が駅跡部分

②郷地駅跡付近

現在、駅があった痕跡は残されていないが、福島通りはかつて大山参[※4]りに使われた「大山道」と呼ばれた古道であったため、そこは踏切番がいた主要な場所でもあった。

この駅跡の近くにある昭和公園には、五日市鉄道に関する看板と石碑が設置してある（写真④・⑤）。石碑は、五日市鉄道の発起人代表であった紅林徳五郎とその子、七五郎の功績を讃える頌徳碑である。人目に付かない場所で、ひっそりと歴史を伝えてくれている。

⑤頌徳碑

④「五日市鉄道の線路跡」の解説文

武蔵福島駅跡―南中神駅跡間

武蔵福島駅跡から南中神駅跡に向かう線路跡は武蔵福島駅跡から西に向かい、住宅街を通り、五鉄通りになっている。

五鉄通りは、昭島市が市制50周年を記念し、かつての五日市鉄道の線路跡を転用しつくられた。五鉄通りを進みながら多摩大橋通りを横切り、さらに先へ進むと南中神駅跡がある。

南中神駅は「停車場」であり、大きな駅であったため、本線の両側に貨物の線路が並行して通っており、列車の行き違いも可能であった（写真⑥）。また、貨物の積込所などが駅構内にあったそうだ（写真⑦）。

実際の駅構内の敷地は、写真⑦付近から、その奥にある中神停車場通りの手前までの一帯である。

駅があった場所を歩いてみると、道が少し広がっていることから、ここに当時線路が通っていた雰囲気を感じることができた。

南中神駅跡―宮沢駅跡間

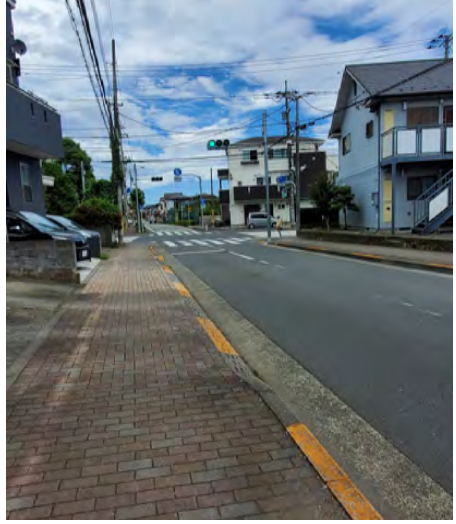
南中神駅跡から宮沢駅跡に向かう線路跡は南中神駅跡を進み、武蔵福島駅跡～南中神駅跡間と同様に五鉄通りになっている。宮沢駅跡は諏訪松中通りとの交差点を渡った先にある（写真⑧）。

宮沢駅は簡易なホームがあるだけの小さな駅で、現在は住宅街となっている。

⑦南中神駅跡
写真奥付近がホーム部分

⑥南中神駅跡
貨物用線路並行部分

※４神奈川県伊勢原市にある大山への参詣のこと


⑧諏訪松中通りとの交差点付近

宮沢駅跡―大神駅跡間

宮沢駅跡から五鉄通りを進んでいくと、だんだんと左右の建物が高くなる（写真⑨）。

なぜこのような坂になっているのだろうか。それは八高線と交差してしまうからである。交差を回避するためにこの辺りは土地を掘り下げて線路を敷く、「切通し」が作られた。そこを通る五日市鉄道の上に橋梁（きょうりょう）を設けて八高線を通すことで立体に交差させ、運行を可能にしたそうだ。

この切通しは道路に転換した際に埋め戻され、橋梁も取り壊されている。八高線交差部分には現在歩行者用の地下通路が設置されている（写真⑩）。

また、当時は八高線の蒸気機関車が橋梁の上を、五日市鉄道のガソリンカーが下を走っていたそうだ。現代ではなかなか見ることができないその光景を想像しながら、歩みを再開した。

大神駅跡に着くと存在した駅ではないが、小さなホームが設置されていた（写真⑪）。かつての大神駅のホームも切通しの影響で道路よりも下にあったそうだ。こちらも現在は埋め戻されている。

⑨切通し部分

また、現在の大神駅跡には小さなホームの他に、踏切の警報機や鉄道信号機、鉄道の車輪などが置かれており、小さな公園になっている（写真⑫・⑬）。これらのモニュメントは五日市鉄道とは直接関係ないが、かつて駅が存在した雰囲気を感じさせてくれる場所だ。

⑩歩行者用地下通路入口

⑬鉄道信号機

⑫踏切の警報機

⑪大神駅のホーム

大神駅跡―武蔵田中駅跡間

大神駅跡から武蔵田中駅跡に向かう線路跡は五日市鉄道の中で最も短く、距離は約400メートルである。大神駅から西に進み、五鉄通りと新奥多摩街道が斜めに交差している部分に武蔵田中駅はあった（写真⑭）。この駅から拝島支線が分岐していたことから重要な駅であったが、そのつくりは簡素なものであったそうだ。

⑭武蔵田中駅跡　正面の家の部分が駅跡

武蔵田中駅跡―南拝島駅跡間

武蔵田中駅跡から新奥多摩街道を西に進むと、国道16号線と合流する。合流地点からさらに西に進み、三つ目の横断陸橋である拝島農協前交差点の手前に南拝島駅跡がある（写真⑮）。この駅は駅長が置かれていた主要な駅であった。南拝島駅から拝島村の集落が近かったことやハイキングコースなどがあったことから乗降客も多かったそうだ。

⑮拝島農協前交差点

南拝島駅跡―拝島駅跡間

南拝島駅跡から拝島駅跡に向かう線路跡は、拝島農協前交差点を少し進み、そのすぐ右手側に見える分かれ道を右に曲がる必要がある。その後、拝島第三小学校へ真っ直ぐに進み（写真⑯）、その先にある歩行者用道路部分へ歩みを進める（写真⑰－1・写真⑰－2）。しばらく歩くと拝島駅の駐輪場に行き着く（写真⑱）。線路跡はその後、駐輪場の前の江戸街道を横切り、写真⑲の右上にある建物を通り駅舎方向に向かっていた。

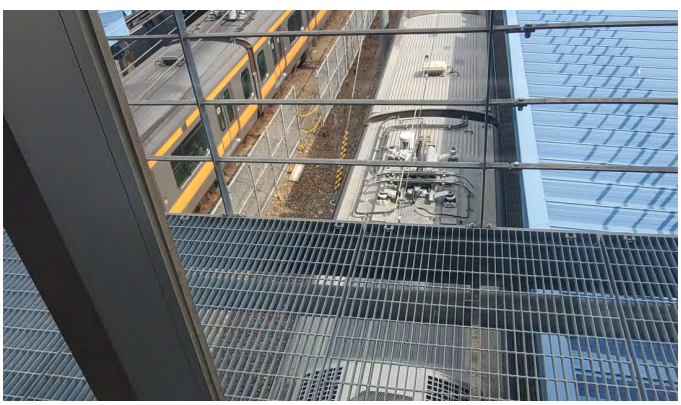
現在、拝島駅にある五日市線ホームには後に設置された五日市線起点標が存在する。

⑯拝島第三小学校

⑰-2 歩行者用道路

⑰-1 歩行者用道路

⑲写真正面が江戸街道　矢印部分の方向に五日市鉄道が通っていた



▲正面が現在の五日市線　左は青梅線

⑱拝島駅駐輪場

五日市鉄道の廃線跡を歩いて

今号のテーマである「みち」がきっかけで五日市鉄道の線路跡を知ることができた。しかし、当時の線路跡を探索し、実際に歩いてみることは時間がかかり苦労した。また、どの道か分からなくなることもあり想像以上に難しいことだった。その反面、達成感にあふれ、充実したものでもあった。廃線になってから何十年も経ち、かつての面影を残している部分はほとんど見られなかったが、注意深く見渡すと、それは現在の地形に残っていることが分かった。線路跡はそのほとんどが道路になっているが、道路の広がりやその道の名称は、確かに、かつてそこに鉄道が走っていたのだということを私に伝えてくれた。

線路跡を歩いている途中で一人のおじいさんに出会った。五日市鉄道に乗車したことがある方で、その当時、どのような様子だったのか、明るく、かつての記憶を懐かしむように語ってくださった。また、他にも数人の方々に五日市鉄道について尋ねたが、意外なことにその存在を知っている方が多く、どの道を歩けば良いのかを教えてくださった。五日市鉄道について語る方々を見て、この鉄道が人々の記憶の中に残り続けていることが分かった。

五日市鉄道は、時代の流れによって廃線となり、使われなくなってしまった。その事実は書物などの記録で知ることは出来るが、実際に歩いてみなければ気がつかないことが多い。五日市鉄道を利用していた人々の思いや名残を知り、五日市鉄道がどれほど愛されていたのかということを肌に感じた廃線めぐりであった。

荒井涼花（史学科2年）＝文・写真

〈参考文献〉
昭島市教育員会『昭島消えた五つの鉄道』昭島市教育委員会生涯学習部教育課（2017）
栗原景『地図で読み解くJR中央線沿線』三才ブックス（2020）

野猿をたずねて

「野猿」とは、本学周辺に位置している土地の名前である。本学学生や地域住民の方にとっては馴染みの名前かもしれない。また、その名を知る人が「野猿」と聞いてまず思い浮かべるのは、おそらく「野猿街道」や「野猿峠」であろう。一方で、その名の由来について不思議に思う人も少なくない。

野猿は、「野」の「猿」と書くが、野猿地域に猿はいたのだろうか。こういった疑問から、今回私は「野猿」という名前の成り立ちや、その背景について調査した。また、実際に「野猿」を歩くことによって、様々な「わくわく」に出会うことが出来た。本記事では、そういった、調査の中で得られた様々な経験や考察をつづった。

野猿のお話を伺った平野さん

「野猿」の歴史

実のところ、「野猿」という名前の由来ははっきりしていない。そこで私は、長年野猿地域に住み、その歴史をよく知る、平野雄司さんにお話を伺った。

戦国時代、現在の「野猿峠」は「甲山峠」と呼ばれていた。しかし、江戸時代には「甲」が「申」と誤って伝わり、「甲山峠」は「猿丸峠」として地域に定着していった。今でも、地域に住む高齢者の方の中には、「猿丸」の名を使う人がいるという。さらに時代が進み、1940年代頃から、ついに「野猿峠」という名称が文献に用いられるようになった。つまり、「野猿」という名は「伝達ミス」から生まれたというのだ。したがって、そこに特別な意味が込められている訳ではない。

ところで、ここまで記事を読み進めて、なぜ野猿峠が以前は「甲山峠」と呼ばれていたのか気になる読者もいらっしゃるだろう。

戦国時代、現在の野猿地域周辺は、大石定久という武将が治めていた。しかし、彼は養子である北条氏照との勢力争いに敗れ、切腹によって生涯を閉じることになった。1549年10月7日のことであった。そして、彼の自害した場所が、まさに今の野猿峠だった。当初、峠周辺に彼の墓が建てられたが、そこから埼玉県にある「武甲山」が見えたため、墓周辺は「甲山峠」と名付けられたという。その後、墓は「永林寺」という八王子市下柚木にある寺に移設された。

永林寺にある大石家のものとみられる多数の墓

野猿を歩く

「野猿」の歴史を知り、私は野猿の地を自らの足で歩き、その歴史を肌で感じたいと思い立った。そして初夏のある日、実際に「野猿」へ赴いた。

私は帝京大学八王子キャンパスの正門前を通る「野猿街道」から、その歩みを始めた。

野猿街道は、東京都国立市にある「青果市場東交差点」と、八王子市にある「横山郵便局前交差点」を結ぶ全長15キロの都道である。今回の出発地点は、そのちょうど中間に位置する。

最初の目的地は、定久の墓がある「永林寺」だ。そこに向け、初夏の太陽の下で歩き始めた。歩き始めるとすぐ、夏の暑さを背中に受け、汗が流れてくるのを感じた。

中和田天神の鳥居。林に隠されているため、普段目にすることは少ない

中和田天神

数分後、ふと林の中を見ると、鳥居がひっそりとたたずんでいるのに気がついた。気になって中をのぞくと、そこは「中和田天神」であることが分かった。おそらく、本学学生であればよく知る名前なのではないだろうか。というのも、多くの本学生が通学にバスを用いるが、その停車駅の一つに「中和田天神」があるのだ。林によって隠されているため、普段はその存在に気を留めることは少ない。しかし、こうした偶然の発見は、大いに好奇心をくすぐる。記事の本筋から離れてしまうが、これも取材の面白さの一つなのだと、私は思う。参拝をすませ、再び歩き始めた。

永林寺

30分ほど歩いただろうか、永林寺に到着した。寺は想像していたよりも大きく、門の左右では仁王像が鎮座していた。

境内が想像以上に広かったために時間がかかってしまったが、10分ほど歩き回り、ようやく目当ての定久の墓を見つけた。一見すると、定久の墓は一般的なそれと大きな変わりはなく、ひっそりとたたずんでいた。さらに境内の奥に進むと、小高い丘があった。階段を上り丘の上に着くと、そこでは大石定久の石像が私を迎えてくれた。

永林寺を後にし、次の目的地である「野猿峠」に向かおうとしたその時、雨がぽつりぽつりと降ってきた。その日のうちに訪れたかったが、日を改めることにして、私は足早にその場を去った。

永林寺の仁王像。写真は吽形像

野猿峠

前回から約1カ月後、再び野猿街道を訪れた。今回の目的地は「野猿峠」である。前述のように、そこから埼玉県にそびえる武甲山が見えたことから、野猿峠はかつて「甲山峠」と呼ばれていた。本当に見えるのだろうか。

本学前からバスに揺られること約30分、車窓を流れる景色に緑が混じり始めた。さらに数分後、「峠」を思わせるような緩い坂道を登り、ようやくバスは目的地に到着した。降りてみると、そこには今が7月であることを忘れさせるような涼しい風が、さらさらと優しく吹いていた。

バス停を降りてすぐ、道路脇の林の中に小道を見つけた。気になって、少し傾斜のある道であったが進んでみることにした。林によって夏の日差しは遮られ、木々の間から漏れる光がゆらゆらと揺らめいていた。その光景が、なんとも幻想的であった。右、そして左、と何度か角を曲がり林を抜けると、壮麗な山々が眼前に現れた。もしや、あの中に武甲山があるのではと思い、私は近くにいた方にお話を伺った。しかし、目の前に見えている山々はいずれも武甲山ではないとのことだった。武甲山のある埼玉方面を見るには、少々方角を変える必要があった。

再び歩き始めた。どれほど歩いただろうか、武甲山の方角には林や住宅があり、それらが隠してしまう。もう見つからないのではないか、という思いが頭の中に満ちていった。そんなことを考えながら歩いていると、先ほどとは違う山並みが突如目の前に現れた。もしやと思い、携帯の地図アプリで確認をすると、その山々の中に武甲山を見つけた。その瞬間、「ついに見つけた！」という

大石定久の石像。思いのほか大きく、迫力があった

竹の林の中へと続く道路脇の小道

埼玉県の秩父山塊。写真中央の赤い鉄塔の上にちょこんと突き出しているのが武甲山

思いがあふれた。また、昔の人が見ていた景色を今自分も見ている、という感動に胸が高鳴った。

＊＊＊

本記事で執筆は3度目になる。もちろん執筆にかける部員の思いはそれぞれ異なるが、私自身に関して言えば、それは「知的好奇心の探求」である。これは私の執筆した記事全ての、いわば「背骨」を成すものだ。

本記事の執筆にあたり、私は「野猿」という言葉の由来を調べた。そして意外なことに、その名が誤りから生まれた可能性があることを知った。しかし、好奇心はそこで終わらない。今度は、野猿にゆかりのある「大石定久」という人物に興味が湧き、彼の人生を調べた。そうして行き着いたのが「永林寺」であり、野猿峠なのだ。調査を続ける中で、知識と知識がつながり新たな発見や疑問が湧いてくる。それによって、自分の想像や好奇心が、より大きく広がっていく。さらに、そういった「わくわく」を、実際に脚を使って確かめ、肌で感じてみる。

大人になるにつれて、何かを純粋に「面白い」と思うことが減ってきたように感じる。子どもの頃、時間を忘れて興味のあることに没頭したことはなかっただろうか。忘れかけていたそうした営(いとな)みを、ミコタマの活動は思い出させてくれる。

三好 龍之介（経済学科3年）
＝文・写真

取材協力
荒井 涼花（史学科2年）

いかがだったでしょうか。

さまざまな「みち」を見ることができたと思います。

ある編集部員は「散歩」の哲学を見せてくれました。

取材の中で「未知」の事柄へ飛び込む勇気を学んだ部員もいます。

またある記事では、苦難を乗り越え、今を強く生きる方の姿が描き出されました。

みちはどこまでも続いていきます。

そして、「人生」であれ「歴史」であれ、それらのみちを、私たちは様々な不安や葛藤と共に歩んでいくのだと思います。

多摩川河川敷を歩く (2022 年 10 月 16 日)

防人が歩いた道

防人の妻の歌

赤駒を山野にはがし捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ（四四一七）

この歌は『万葉集』巻二〇に収録された防人の歌の一首で、作者は武蔵国豊島郡（東京都23区の一部）の防人椋椅部荒虫の妻宇遅部黒女である。先行研究を参考にして現代語訳すると「山野に放った馬を捕まえられなかったよ……（防人の夫を馬で行かせてやれず）多摩の横山を徒歩で行かせることになってしまったなぁ……」となる。

奈良時代、正丁（21歳から60歳の男性）は、三人に一人の割合で徴兵された。兵士になると軍団という組織に所属して軍事訓練を受けたが、兵士の一部は、辺境防衛のために筑紫（福岡県）に派遣された。これが防人である。防人は武蔵を含む東国から動員され、派遣期間は律令（法律）の規定では3年間だったが、期間が延長されて帰郷できず、現地で死んでしまった防人も多かったという。

『万葉集』には、防人やその家族が作った歌（＝防人の歌）が、巻一四と巻二〇に一〇〇首近く収録されており、家族との別れの悲しみや生活の苦しさを詠った歌が多いとされる。信濃国小県郡の防人他田舎人大島の次の歌はあまりにも有名である。

韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして（四四〇一）

（衣服の裾に取りついて泣く子どもらを置いて来てしまったなぁ……母親もいないのに……）

巻二〇の防人の歌は、大半が天平勝宝7（755）年2月に筑紫に派遣された防人たちの歌で、遠江・駿河（ともに静岡県）・相模（神奈川県の一部）・上総・下総（ともに千葉県）・常陸（茨城県）・信濃（長野県）・上野（群馬県）・下野（栃木県）・武蔵（埼玉県と東京都・神奈川県の一部）の各国から動員された防人やその家族が作った歌である。冒頭の防人の妻の歌からは、防人として旅立つ夫、永遠の別れになるかもしれない夫、その夫を徒歩で行かせることになったしまったという、妻の無念さが伝わってくる。なお、律令の規定では、防人が牛馬を伴うことが認められていた。

防人の旅

防人は、いったん国府に集結して、その後、国司が部領（引率）して難波津（大阪市）へ向かった。難波津からは専門の使者が引率し、船で筑紫へ向かった。天平勝宝7年に派遣された武蔵の防人は、武蔵国府（府中市大國魂神社周辺）に集結したのち、掾（国司の第三等官）の安曇宿祢三国に部領されて難波津へ向かった。

武蔵から難波津までは陸路だが、どのようなルートをとったのだろうか。天平勝宝7年の時点では、武蔵はまだ東山道に所属していた（武蔵が東海道の所属になるのは宝亀2（771）年である）。東山道とは、平城京（奈良市）を起点として、近江（滋賀県）→美濃（岐阜県）→信濃→上野→下野→陸奥（福島県・宮城県）へと内陸部を進む幹線道路である。武蔵から西へ行くに

▲武蔵国府跡。大國魂神社のちかくにある

は、この東山道を通るのが正規のルートだった。しかし、実際には太平洋岸を西へ向かう東海道を行くこともあった。武蔵の防人はどうだったのか。武蔵の防人が詠んだ歌の中に「足柄の峰」（四四二一）、「足柄の御坂」（四四二三）を詠んだものがある。「足柄の峰」「足柄の御坂」とは、東海道の駿河と相模の境にある足柄峠のことだ。武蔵の防人は東海道を通って難波津へ向かったのである。

冒頭の歌で防人の妻は、「多摩の横山を徒歩で行かせることになってしまったなぁ……」と嘆いた。「多摩の横山」は、武蔵国府から見て南に横たわる多摩丘陵のことである。つまり、武蔵の防人は、武蔵国府から南へ進み、多摩丘陵を越えて相模へ向かう道を通ったのである。現在の市名で言えば、府中市から南へ進んで多摩川を渡り、多摩市を縦断して多摩丘陵を越え、町田市から神奈川県相模原市へ抜けていく道を通ったということになる。そして、相模からは東海道を西へ、難波津へ向けて進んだのである。

見つかった古代の道路

武蔵の防人は歩いて多摩丘陵を越えた。その道はどのような道だったのか。実は、この道を北へ延長させた続きとみられる古代の道路跡が国分寺市で見つかっている。

国分寺市泉町で行われた発掘調査では、両側に側溝がある幅12メートルの直線道路跡が南北340メートルにわたって発見された。また、泉町の北に位置する同市西恋ヶ窪の低地で行われた発掘調査では、ぬかるんだ湿地に対応するために、敷粗朶工法とよばれる土木技術が用いられた道路跡が見つかった。どちらもしっかりと整備された立派な道路だ。泉町と西恋ヶ窪で見つかった道路跡は、南北方向に延びる同一の道路で、東山道が上野で分岐して南進し、武蔵に至る東山道の支路である。研究者はこの道路を「東山道武蔵路」と呼んでいる。東山道武蔵路は、国分寺市からさらに南へ進み、防人が歩いた多摩丘陵越えの道につながるのである。

防人の妻は夫を徒歩で行かせることになってしまったと嘆いたが、夫が歩いたその道は、丘陵越えに対応した、しっかりと整備された道だったに違いない。

相澤　央（史学科准教授）＝文・写真

▲東山道武蔵路周辺の古代道路網
国分寺市教育委員会ふるさと文化財課編『武蔵国分寺のはなし』改訂２版増補版 国分寺市教育委員会（2014）より

▶東山道武蔵路跡。西国分寺駅の東南、徒歩で約 10 分のところ。側溝の部分を黄色いアスファルトで舗装しており、古代の道路の広さを実感できる

▲オレンジ色をしたスライムのような物体は「樹液酵母」と呼ばれる。天然の酵母が樹木から流れ出た樹液を栄養源として繁殖して作り出したコロニーだ（2022年4月8日）

◀近づいて観察してみる。グロテスクな見た目だが、匂いが無く粘り気も無い（2022年4月8日）

キャンパス自然観察だより

雑木林のスライムの正体

4月初旬の穏やかな朝。キャンパス内の切株にオレンジ色のスライムのような物体を発見した。この正体を知りたくなり調べることにした

堀越峰之（帝京大学総合博物館）＝文・写真

なんだこりゃ。

「うわー。なんだこりゃ」私が、雑木林の中でスライムような物体を初めて見つけた際の印象だ。

オレンジ色のブヨブヨした物体が、樹液が染み出している切株を覆っている。周りには、小さな羽虫が飛び交っている。見た目はかなりグロテスクだが、怖いもの見たさでなぜかじっくり見てしまう。

「樹液酵母」は食べられる？

この物体の正体は何なのか。手始めにインターネットで調べてみた。「切株」「オレンジ」「ブヨブヨ」と思いつくキーワードを入力し検索すると情報が出てきた。どうやら「樹液酵母（じゅえきこうぼ）」と呼ばれるものらしい。天然の酵母が樹液を栄養源として繁殖し、作り出したコロニーが物体の正体だそうだ。

さらに調べると、昆虫やリスが食べるという情報を発見した。さらに実際に食べてみたという人もおり、濃厚な樹液の味が口の中に広がるらしい。酵母は食品の発酵にも使われている。つまり樹液酵母は天然の発酵食品なのだろうか。

これは食べてみなければと思い、物体の一部を持ち帰って食べてみることにした。割りばしでつまんで、物体を切株から引き剥がす。粘り気は無く肉厚なので見た目に反して剥がしやすい。それをビニール袋に入れて持ち帰り水洗いをした。

わからないものは食べない

食べる前に観察をしてみた。手で触ると弾力があり、やや硬いスライムのようだ。匂いも嗅いでみる。ほとんど匂いはしない。それでは、いよいよ食べてみる。箸でつまんでいざ実食……。と思ったが、やっぱり躊躇（ちゅうちょ）する。食中毒になったら……。という一抹（いちまつ）の不安が頭によぎる。

そこで、酵母やカビの研究のエキスパートである帝京大学医真菌研究

センター副センター長の槇村浩一先生に、本当に食べられるのかを質問してみることにした。「樹液酵母と呼ばれるものは食べても大丈夫でしょうか」と先生にメールすると、数分でお返事が返ってきた。

「食べられる酵母とは限らず、毒性のある菌類や藻類も同様に生えるので、他に食べ物が無く、食べなければ餓死するのでない限りおすすめはしません。」とのお答え。食べなくてよかった……。

おっ。いたいた。

ところで今回、発見した樹液酵母はどんな酵母のコロニーなのか。槇村先生から「あまり調べられていないから、サンプルを採って顕微鏡で確認してから培養してみよう」と提案を頂く。

早速、槇村先生と、もう一人のエキスパートである加納塁先生と共に切株の下へ。樹液酵母を見ると、「ロドトルラかな?」とつぶやく槇村先生。ロドトルラは、お風呂場に現れるピンク色のヌメリの原因となる酵母だそう。

樹液酵母の表面を綿棒でぬぐい、その先端についた樹液酵母を顕微鏡で観察するためにスライドグラスに擦り付ける。あわせて酵母を培養させるために寒天で作った培地にも塗り、実験室に持ち帰る。

綿棒でサンプルを採取する槇村先生と加納先生(2022年4月11日)

サンプルを顕微鏡で観察(2022年4月11日)

早速、顕微鏡で観察すると「おっ。いたいた」と槇村先生が声を上げる。

見つけたのは、ロドトルラと思われる酵母。この酵母はオレンジ色をしたカロテン色素を作るそうだ。次に見つけたのはバナナのような形をしているフサリウムと呼ばれるカビ。カビ毒を作り出し、赤カビとも言われる。樹液酵母がオレンジ色をしているのには、発見した酵母とカビが関係しているかもしれないと槇村先生が教えてくれた。

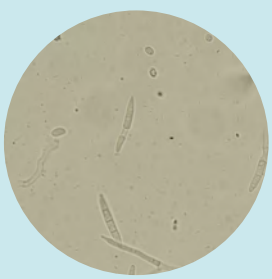
その他、クロレラやバクテリアも確認できた。樹液酵母は酵母だけでなく、多様な微生物のコロニーだった。これらを培養して遺伝子レベルで同定すれば正確な名前がわかるそうだ。今後の結果が待ち遠しい。

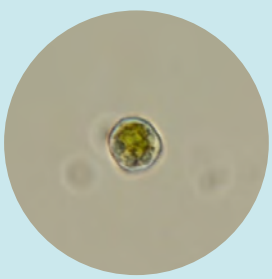
＊＊＊

その後、樹液酵母は4月下旬にかけて段々と少なくなり、5月に入ると跡形もなく消えていた。

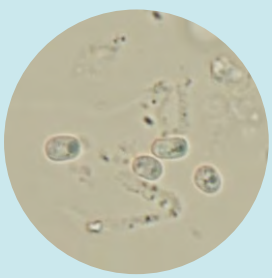
わずかな期間だが微生物の営みが垣間見られる瞬間だったたのだろう。また来年も見られるかもしれない。

顕微鏡で覗いた雑木林のスライム(樹液酵母)の正体


▲無数の小さな点は、バクテリア


▲藻類のクロレラもいた

▲フサリウム。「赤カビ」とも言われ、カビ毒を作る


▲ロドトルラと考えられる酵母。カロテン色素を作る

ミコタマ通信

ミコタマ SNS のフォローはこちらから！

Twitter ユーザー名↓
@Teikyo_Micotama

instagram ユーザー名↓
teikyo_micotama

Twitter と Instagram を開設しました。刊行のご連絡や本誌設置場所の告知、記事で使用されなかった写真の掲載等をしていきます。SNS を通じて読者の皆様にミコタマをさらに身近なものに、また、私たちの活動をより深く知っていただける機会を広げていきたいと思います。ぜひフォローをよろしくお願いいたします！

アンケートへのご回答をお願いします！

アンケートの URL ↓
https://forms.gle/sQ3kmTX8EHNcP5ow6

本誌の読者の皆様からご意見・ご感想を受け付けています。本誌をより良い記事にするため、また、皆様との繋がりを持ちたいとの思いからアンケートを作成しました。アンケートの回答時間は最短で１分程度です。上記の QR コードまたは URL をご利用の上、ぜひご回答をよろしくお願いいたします！

過去のミコタマは WEB でもご覧いただけます

http://teikyo.jp/museum/database/

この４号をはじめ、過去のミコタマはすべて帝京大学総合博物館の HP よりご覧いただけます。こちらの QR コードの読み取り、または URL を検索していただき、ご閲覧ください。
また、学生メンバーでミコタマ専用の HP も作成中です。そちらの情報はミコタマ SNS で発信いたしますのでお待ちください。

新たに４名の新メンバーが加わりました

新学期になり、ミコタマの新規メンバーを募集したところ、計４名の新メンバーが加わりました。昨年度までは、新メンバーは１ページのみの執筆でしたが、今号では２から４ページを担当しています。また、既存メンバーも負けじと執筆し、第４号は仕上がっています。

帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2022 第 4 号

発行
帝京大学総合博物館

編集長
上原 有響
三好 龍之介

編集・デザイン

上原 有響〔2-5,18-21,42-45〕
三好 龍之介〔6-7,32-35,36-37〕
加藤 直樹〔8-9〕
下坂 愛梨紗〔10-13〕
山﨑 柚夏〔14-17〕
カン ミンジョン〔18-21〕
阿部 蓮太郎〔22-25〕
荒井 涼花〔1,26-31〕

堀越 峰之〔40-41〕

特別寄稿
相澤 央〔38-39〕

※〔〕は担当ページ

その他サポート
工藤 玲奈
祝 ちとせ

ロゴデザイン
寺澤 頼来
荒井 涼花

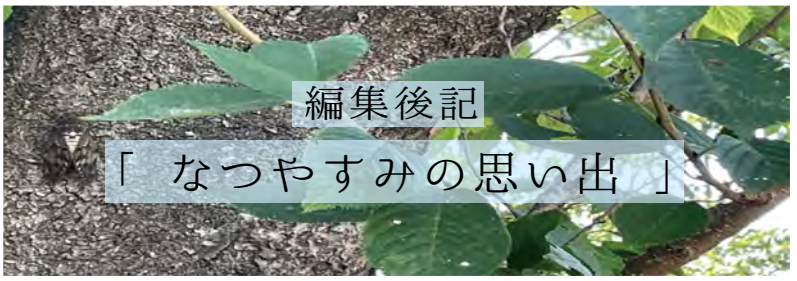
校閲・管理
川北 友美
甲田 篤郎

印刷・製本
㈱ インフォテック

発行日 : 2022 年 11 月 17 日
発行部数 : 1000 部

発行 / 編集
〒 192-0395
東京都八王子市大塚 359 番地
帝京大学総合博物館
多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン『ミコタマ』編集部
E-mail:teikyo.u.museum@gmail.com

© 2022『ミコタマ』編集部
乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。
編集部までお知らせください。



編集後記
「 なつやすみの思い出 」

8月になると、いつも小学生の頃の夏休みを思い出します。当時の私はよく母親にお菓子の工場見学やパンの手作り体験、屋外でのカレー作りなど色々な場所へ連れられて行っていました。当時は「なんだか面倒臭いな」と思いながら嫌々行っていました。3年生の夏休みには自由研究として、行った場所や体験をアルバムのようにまとめました。その後、数日間教室の隅に飾られ、同級生から注目を集めた時の恥ずかしさたるや、忘れることができません。しかし、今思い返せばどれも貴重な体験です。そんな夏休みを送らせてくれた母親には、直接は言えませんが、感謝しかありません。まあ夏休みの課題は後回しにしがちでしたが……。（上原有響）

特に印象に残っている思い出は、小学５年生の自由研究でちぎり絵を作ったことです。当時の私は絵を描くことが好きだったので、自由研究を何にするか迷ったとき、ちぎり絵を作る事に決めました。 最初は順調に作業が進んでいたのですが、用意した台紙が大きすぎて作業が進まなくなってしまい、結局最終日の日付が変わるまで作業が終わらず凄く大変な思いをしました。今となってはギリギリまで作業したこともいい思い出ですし、あきらめず最後までちぎり絵を完成させたことで達成感も得られ、それが自信にも繋がったなと思います。ですが、何事も事前に計画を立てて余裕を持つことが大切ですね。（山﨑柚夏）

夏休みの思い出といえば花火です。小さい頃、毎年夏休みに親の実家に帰省をして、夜にはよく花火をしていました。買った花火を持ち寄って、いとこの家族たちと分け合いながらやっていたことをよく覚えています。私やいとこが成長したり、コロナ禍のために帰省できない年があったりとなかなか集まることが難しい現状ですが、久しぶりに集まる機会があれば、またみんなでやるのも良いかもしれません。自分の地元では花火大会を見に行って楽しんだこともありますが、帰省先の澄んだ空気の中で混雑を気にせず、手元でこじんまりと花火を楽しむことも、趣があって良いものです。（下坂愛梨紗）

mico tama
ミコタマ
ミコタマ 2022 第4号 特集『多摩で発見、「みち」の冒険』
帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト
フリーマガジン 2022 第4号
発行日 2022年11月17日
発行 〒192-0395 東京都八王子市大塚359番地 帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト フリーマガジン『ミコタマ』編集部
帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

小山田緑地にあるつり橋（2022 年 5 月 28 日）

帝京大学総合博物館 多摩のヨコガオ発見プロジェクト

帝京大学八王子キャンパス周辺の自然、文化、歴史、現在に関する魅力を、帝京大学総合博物館が調査したことをもとにして広く社会に紹介するプロジェクトです。

「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遣らむ」（万葉集）

放牧してある赤駒を捕まえることができなくて、険しいという「多摩の横山」を（防人に赴任する夫に）歩かせてしまうことになったよ。

この歌は、奈良時代に編まれた『万葉集』の歌の一つです。「防人」として武蔵国を離れて九州に赴任する夫を妻が気遣った歌です。「多摩の横山」と呼ばれる場所は、ちょうど帝京大学八王子キャンパス周辺にあたります。丘陵が、横に長く連なる様子を当時の人々は「多摩の横山」と呼びました。万葉集の頃の「多摩の横山」の面影は、現在は少なくなりつつあります。ですが、しっかりと目を凝らしてみると過去の面影を感じ取ることのできる場所が残っています。そして、それらの場所には過去から現在までの人々の営みが連綿と続いています。このプロジェクトは「多摩の横山」に残された自然や文化、歴史、そして現在の人々の営みに光を当てて紹介するものです。普段は何気なく通り過ぎて気がつかない魅力あふれる「横山」ならぬ「多摩のヨコガオ」を探して記録し、社会に発信していきます。

（38 頁にてこちらの「防人」に関する記事を、史学科准教授の相澤央先生に執筆して頂きました。是非ご一読ください。）

帝京大学総合博物館 Teikyo University Museum TUM